

石田徹也が生きた時代

「気概と告白」

上田雄三

「第五福竜丸」と「Lucky Dragon」からの影響：

1973年6月16日、石田徹也は静岡県焼津市で生まれ、2005年5月23日、東京都下の町田市にて電車の踏切事故で、わずか31歳の若さで亡くなった。石田徹也の生まれた焼津市は東京から西に向かって、新幹線（電車）で約1時間半余りの距離。漁港を中心に発展し、遠洋漁業、水産加工業の町として日本全国に知られている港町。と同時に1954年3月1日にアメリカ軍の水素爆弾実験「キャッスル作戦」によって太平洋のビキニ環礁にて巻き込まれて、23名の漁師が被爆した事件、「第五福竜丸」（マグロ漁船の名前）の町としても知られている。

そしてこの事件から4年後の1958年、アメリカの原子物理学者Ralph E. Lapp博士<1.>（1917～2004）は“The Voyage of the Lucky Dragon”＝「福竜」を出版。その後Ralph E. Lapp博士は”Harper’s Magazine”にレポートを寄せた。そのレポートの挿絵をBen Shahn<2.>（1899-1969 ユダヤ系リトアニア人）が担当した。この挿絵の原画、30点の素描画の展覧会が焼津市に開かれて、石田徹也は幼い頃（1981）にそのBen Shahnの”Lucky Dragon Series”＝「福竜」（1958）の素描画に衝撃を受けることになる。

彼の日記には「Ben Shahnのような画家になりたい。」と記されている。

1981年彼が8歳の時に焼津市の読書コンクールに応募し、入選している作文が残されている。タイトル『まっしろ船君（死の灰を受けた第五福竜丸を意味して名付けたようだ）』という作文をあえて一部紹介する。

「～からだぜんたいが、わるくなって、くるしんでしまった、水バクがげんいんで、頭の毛がぬけたり、血がすくなくなつて、おきられなくしごともできないで、くるしんだりして本当にかわいそうです。なぜ、人間どうし、水バクをつかつてころし合うのかなと思います。」（読書コンクール作文から抜粋 1981. 10. 5）

この作文はその後の石田徹也の作品の題材となるテーマ「社会へのメッセージ」としての原点と言えるだろう。小学生であった彼自身の中にすでに人へのやさしさや不幸を感じ取り、「正義感」が育まれている。そして水爆という人類の科学への信仰や科学の発明が人類をやがて不幸に導くことをすでに予感していた、むしろわずか8歳の子供に水素爆弾実験の全てのことに理解していたとは思わないが、「まっしろ船君」＝「第五福竜丸」は彼の中に潜む「敵」や「悪」を感じとっていたことは確かだろう。さらに1984年彼が11歳の時に「人権マンガ」（静岡地方法務局主催）に応募し最優秀賞を受賞しているが、その受賞作品のタイトルは「弱いものいじめはやめよう」という社会問題を絵で表現していることから彼の表現はしだいに「人権」を尊重し、科学への信奉を否定する、機械文明への批判によるものへと発展していったと考えられる。本人は意識せずとも自らを自画像（キリスト）として、あるいは殉教者として描くことで、自我と対峙し、葛藤していく様子を＜不在化する自己＞として心の奥にすでに潜んでいたと思われる。

「ガンダム」から「エヴァンゲリオン」へ：

彼のその後の表現の中で、特に大学生時代からの絵画に出現する車や電車、飛行機、あるいは「Supermarket, 1996」、「Observation, 1999」、「Interview, 1998」の絵画のように機械（文明／水爆）と合体する表現は、幼いころの心の奥にある「まっしろ船君」＝「第五福竜丸」という擬人化＝合体、ダブルイメージとなり、モップを擬人化＝合体する人間「Tremor, 2002」は私たちにユーモアでありながらも得体の知れない恐怖を与えている。

彼の幼い心の中に芽生えた「正義感」や「機械文明」への人間社会への痛烈な批判はやがて消費され捨てられていく人間像「Untitled(2), 1998」であったり、自身がオモチャの組み立てキットの人形となった「Recalled, 1998」表現へと変化する。また人々がエスカレーターという機械に流されて解体されて行く様子「Conveyor-belt People, 1996」、同じくベルト・コンベアーの機械の上を走らされる自身、社会から落ちこぼれることなく、死ぬまで同じベルト・コンベアーの上でもがく、人間社会の制度を皮肉った「Exercise Equipment, 1997」は見るものの心の中の不安と恐怖を鋭く描く。それはチャップリンのモダンタイムス映画のようにも見える。石田徹也の描く機械たちは小学生の頃テレビで放映されたロボット・アニメーションの先駆けとなった、人間と合体する「機動戦士ガンダム(Mobile Suit GUNDAM)」〈3.〉(1979-)からの影響も多く受けている。また石田徹也が亡くなる直前まで描いた絵には「新世紀エヴァンゲリオン(Neon Genesis EVANGELION)」〈4.〉(1995-)の人類の半数が死滅した設定のマンガから、死線へと向う自身を描いているようにも思える。「Waiting for a Chance, 1999」そして死後に向かう川（三途の川）をまたぐように橋のベッドが描かれて、書籍が積まれて、川に薄らと映る人の気配を感じさ「Untitled, 2004」不安気な絵を描ようになっていた。彼の絵に登場する死を感じさせるイメージは当時、オカルト集団（オウム心理教）〈5.〉が世紀末を思い起こす事件、死と背中合わせにいた不安もその要因の一つと言える「The Visitor, 1999」。この図版には画像がないこの作品は麻原彰晃（死刑者／オウム心理教祖）の顔がオーム貝（同じ発音 AUM）と合体してドアから訪れるという恐怖を描いている。彼の創作ノートには以下のように記されていたことから推測すれば「失われた 20 年」の日本人の心の闇や不安が社会的な事件を通じて、日本人どうしの理解不能を感じ、「わかり合える日本人」を望んでいたことが示唆される。

「日本人の心理的な特徴として『わかり合える日本人』というのがないだろうか。日本人であれば、全てのことは大声で言わなくとも、わかると思っている、上祐（広報幹部）がしょうげき的だったのは、『わかり合えない日本人』というものをみな知ってしまったからだ。言語の構造、発想も全く理解できない日本人。」（創作ノートから抜粋）

「機動戦士ガンダム」にしる、「新世紀エヴァンゲリオン」にしる、人類の存亡の危機を背景とした世紀末のアニメーションが石田徹也の世代の若者に受け入れられて、大変な反響を呼んだ理由に、オカルト集団（オウム心理教）の事件や日本人社会における理解不能な状況、閉塞的で疲弊した時期、「失われた 20 年」となって日本の経済の低迷期（1991-）と重なる。石田徹也の世代は就職も困難で「ロスト・ゼネレーション」とも呼ばれ、就職難民世代とも呼ばれた。彼は武蔵野美術大学のデザイン科を卒業しており、デザイン科出身

の友人たちが就職していく中で、就職せずアーティストの道を決意するのもしこうした就職難民世代であったことも確かだろう。ここに紹介されている13点の図版以外の作品にも、彼が亡くなる直前までの2005年間の絵の殆どが、多感な石田徹也はノイローゼ状態に陥り、悩まされた時期でもあり、精神的にも不安な日々を過ごしていた。こうした日本の社会が不安定な時期に描かれた彼の絵は私たち自身の背景と重なり、人々の心の中の葛藤を描く表現が、見る者にも痛々しく感じさせられる。

また石田徹也は1997年起きた「酒鬼薔薇聖斗(さかきばらせいと)」の14歳の少年による殺傷事件にも衝撃を受けていた。14歳の少年は2人の児童を殺害し「首をじっくり鑑賞したい」と自分の学校の校門にその少年の首を置き、またビニール袋の中に首を入れて、自分の家の屋根裏に隠し、眠たそうな児童の目が嫌いだとナイフでえぐったりもした。少年は汚れた児童の頭の髪の毛にクシを入れながら射精をして興奮を覚えたという。当初警察も犯人像が分からず、まして誰もが14歳の少年の犯行とは思わなかった。

14歳の少年が出した地元の新聞の犯行声明文を紹介しておく。

「さあゲームの始まりです。愚鈍な警察諸君ボクを止めてみたまえボクは殺しが愉快でたまらない。人の死が見たくて、見たくてしょうがない。汚い野菜共には死の制裁を積年の大怨に流血の裁きを」(School Kill 酒鬼薔薇聖斗)

こうした14歳の少年の犯罪が起きた時期に「Untitled(2), 1998」の作品は描かれた。

(この作風と同様なものがもう1点ある。)「Untitled(1), 1998」〈6.〉

そして9.11から3.11へ：

何故、石田徹也の絵に誰もが衝撃を受けるのだろうか。彼の描く表現は病的で、恐怖を伴う、自身が痛々しく傷つく様子を克明に描いている。自画像という手法が自虐的であり、息苦しいほど自閉的である。自己分裂とも思える、深い闇。死と生が混じり、自身も踏切事故によって死へと向かったことで、私たちに現実の死を突きつけられた。

彼の描く絵の原点にはやはりあの「まっしろ船君」＝「第五福竜丸」＝被爆としての死のイメージがつきまとう、そして死から再生へのイメージを描く「Descendant, 1999」。彼の描く機械と合体した得体の知れない文明、私たち人類の科学への信仰や科学の発明に警鐘を鳴らすものである。それは世界で唯一の被爆国、日本からの偽りのない“Catastrophe”であるだろう。私たちの脳裏に浮かぶ、生々しい衝撃。2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件、ボーイング707型機とボーイング757型機の旅客機が世界貿易センタービルに突っ込む様子を見て、全世界に衝撃を与えた。政治的背景、民族との紛争、『文明の衝突』〈7.〉は「テロとの戦い」とも表現されて、巨大な航空機という機械の塊が、人類の科学の最大の発明品の象徴とも言うべき航空機が、アメリカの発展の象徴とも言うべき貿易センタービルに突っ込み、崩れ去った姿を見て、機械文明が殺人兵器となって私たちの未来を破壊したことを誰しもが嘆いたことだろう。それは原爆を

開発した、原子物理学者 Ralph E. Lapp 博士のように人類は何によって償うのかという、自らの問いを突きつけられたような思いと同じだろう。

そして 2011 年 3 月 11 日、日本の東北地方太平洋沖地震の津波によって起きた原子力発電所の災害は、未熟な科学の発達による災害。科学への信仰の崩壊はあのエヴァンゲリオンに描かれていた風景と全く同じ様に私たちには見えた。石田徹也は 2005 年に亡くなっている所以この東北地方太平洋沖地震による原子力発電所による災害は見えてはいないが、彼が小学生の時に書いた「第五福竜丸」の被爆の話と重複している。私たちが経験した 2 つの衝撃、9.11 と 3.11 からの衝撃は共に未来からの警告、そして 1945 年 8 月 6 日の広島市の原爆、同年 8 月 9 日の長崎市の原爆、1954 年 3 月 1 日第五福竜丸の被爆。いずれも人類の発明による危機であり、科学を神と仰ぐ信仰となって起こる、科学万能の神話の崩壊は、私たちの近代主義への問いとなる“Catastrophe”である。

石田徹也の描く絵がこうした私たちの経験と心の奥に潜む“Catastrophe”＝「災害の恐怖」に触れていることで彼の死に向かうイメージが私たちの文明の批判となって、私たちの清浄な心に訴えてくると思える。殺伐とした現代社会、他者に交わることなく生きる若者、しかし携帯電話（機械）を友人のように思い、機械である電話だけが外部と繋ぐ経路として大切に現代人「Long Distance, 1999」、” Conquered, 2004” <7.> は、存在なき自己と他者と入れ替る自己、石田徹也の描く自画像は自己分裂と恐怖。自己矛盾という私たちに共通する「自我の喪失の時代」を暗示している。石田徹也が私たちに突きつけた衝撃、それは現代社会の中で歪んだ私たち自らに与えられた「**気概と告白**」と言えるだろう。

最後に石田徹也からのメッセージをここに表記しておく。

「聖者のような芸術家に強くひかれる。『一筆、一筆描くたびに世界が救われていく』と信じ込んだり『羊の顔の中に全人類の痛みを聞いたり』するような人達のことだ。自分が俗物だと思い知らされます。」(1999.6 創作ノートから抜粋)

ps.1 石田徹也は 2005 年 5 月 23 日の午前 6 時頃、東京都下の小田急線の踏切の遮断機に気づかずに入り、電車にひかれてわずか 31 歳の若さでこの世を去りました。彼が亡くなった 30 分前には遠く離れて住む母親が電話を入れていることを後で聞かされました。母親は連日夜勤でアルバイトをして疲れきっている息子を気遣って「朝食をしたの？」と電話を入れている。母親からの電話を受けて、彼はアパートから踏切の反対側にあるコンビニエンス・ストアに朝食を買いに出かけようとし、その時に踏切事故にあい亡くなりました。しかし不思議な事に彼のズボンには朝食をかうための財布がなく、100 ドル紙幣だけが一枚ポケットに入っていたことを私は遺族から聞かされた。

私は彼が亡くなる 2～3 年前に、彼のアパートを訪れたことがある。彼はアルバイトで貯めた 100 万円近くの銀行の通帳を私に見せて、この 100 万円でニューヨークのギャラリーで個展ができないか相談を受けたことがある。私は「ニューヨークには貸し画廊もないし、100 万円では 3 ヶ月で底をつき、とても生活をするこ

とはできない。英語もろくにできないのにニューヨークに行っても誰も相手にしてくれない。もっと作品を一杯描いて、英語を勉強しなくては駄目だ。」とその時伝えた。彼が亡くなった後に私は遺族から日記を読ませて頂いた。彼は私にニューヨーク行きの相談を受けた日から、テレビの英会話のテキストを買って英語の勉強をしていたことが分かった。彼のポケットに残されていた 100 ドル紙幣はいつでもニューヨークに行けるよう用意された彼の夢のキップだったことを知った。

ps.2 ここ書かれた石田徹也の評論は Gagosian Gallery - Hong Kong で開催された 13 点の絵画だけを言及し書かれたのではないことをお伝えします。石田徹也は武蔵野美術大学の学生時代、20 歳から 31 歳で亡くなるまでの間に 200 点以上の作品を残しています。これらの全作品から私は彼の作品について言及し、また小学生の頃の絵画や作文からも遺族から許可を得て読ませて頂き、ここに書かせて頂きました。本カタログは石田徹也を紹介する為の作品はほんの一部であることをお許しください。

注釈及び参考資料：

<1.> Ralph E. Lapp 博士(1917-2004)

原爆を開発したマンハッタン計画に参加したが、その後、核実験による放射性降下物の危険性や放射線の健康面への影響を訴え、大気圏核実験に反対。1954 年のビキニ事件で被曝した日本のマグロ漁船を追った著書「福竜丸の航海」を 1958 年に出版した。

http://en.wikipedia.org/wiki/Ralph_E._Lapp

From Wikipedia, the free encyclopedia

<2.>Ben Shahn(1898-1969)

リトアニア生まれのアメリカの画家。ユダヤ系リトアニア人。ニューヨークのブルックリンに住み、石版画職人として生計を立てていたシャーンは、肉体労働者、失業者など、アメリカ社会の底辺にいる人々と身近に接し、彼らに共感をもっていた。1954年の核実験で被爆した第五福竜丸をテーマにした” Lucky Dragon Series” などが知られている。

http://en.wikipedia.org/wiki/Ben_Shahn

From Wikipedia

<3.>「機動戦士ガンダム(Mobile Suit GUNDAM)」

ロボットアクション以上に、主人公の社会的成長が物語の軸に据えられている。また、戦争を舞台としたリアリティに富んだ人間ドラマと、ロボットを「モビルスーツ」と呼ばれる兵器の一種として扱う設定を導入したことで、1980 年代初頭から半ばにかけての、後に“リアルロボットもの”と称されることになる一連のロボットアニメ変革の先駆けとなった。

http://en.wikipedia.org/wiki/Mobile_suit_gundam

From Wikipedia

<4.>「新世紀エヴァンゲリオン(Neon Genesis EVANGELION)」

第三世代のアニメ作品でもあり、爆発的なアニメブームのきっかけとなった。

物語の舞台は西暦2000年9月13日に起きた大災害セカンドインパクトによって世界人口の半数が失われた世界。大災害「セカンドインパクト」後の世界(2015年)を舞台に、巨大な人型兵器「エヴァンゲリオン」のパイロットとなった14歳の少年少女たちと、第3新東京市に襲来する謎の敵「使徒」との戦いを描く。

http://en.wikipedia.org/wiki/Neon_genesis_evangelion

From Wikipedia

<5.> AUM Shinrikyo

1995年 東京都内の地下鉄による大量殺人事件。地下鉄サリン事件などのテロを含む多くの反社会的活動（「オウム真理教事件」）を行った。自動小銃や化学兵器、麻薬類の量産を行い、教団内に省庁制を敷き、独立国家の創造を目指していたとされる。

http://en.wikipedia.org/wiki/AUM_Shinrikyo

From Wikipedia



“The Visitor” acrylic and oil on canvas 45.5x53cm 1999

<6.>以下の2点が最初に海外にて展示された作品



“Untitled(1)” acrylic on canvas 146x206cm 1998



“Untitled(2)” acrylic on canvas 206x146cm 1998

“Asian Avant-Garde”CHRISTIE’S Auction 12 Octber 1998
at 8 Kings Street, St James’s London
Mark Hinton (Japanese Art)

<7.> ”The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order”

Samuel Phillips Huntington(1927-2008)

<8.>



“Conquered” 53x45.5cm acrylic and oil on canvas 2004

CV

Yuzo Ueda (Gallery Q, Director and Curator)

1951 Born in Shizuoka Prefecture. Japan

1976 B.A Department of Graphic Design Course of Tama Art University, Tokyo

2008-2012 Visiting Lecture of Art Science at Tama Art University, Tokyo

2007- Executive committee of "Committee of Tetsuya Ishida"

Curator of Tetsuya Ishida

Selected Exhibitions:

1999 "Tetsuya Ishida – First Solo Exhibition" Gallery Q, Tokyo

2007 "Tetsuya Ishida – The Sad Canvases"

Shizuoka Prefectural Museum of Art Shizuoka Prefecture, Japan

2007 "dis-communication" Sungkok Art Museum, Seoul, Korea